

新・氷華集

\*当月の雑詠から金久美智子・尾池和夫 抄出

秋繭の荷出しを明日に眠りこけ

宮下明子 氷壺集

大夕焼かつて煙を噴きし山

余米重則

納涼や幽霊役の肝つ玉

中嶋文子

帆船の帆を張りてより秋立ちぬ

宮澤淑子

七夕や口に出せねば文字に書き

大南勝臣

防空壕塞ぐ鉄柵木下闇

佐々木 成

宿題を机の端へ梨を剥く

大口彰子

花莫蔭や田の字の間取り開け放ち

羽鳥正子

賄ひは男に任せ泥鱧鍋

高橋千画子

石垣の蟹の気配をのぞきけり

佐藤美智子

花莫蔭や川の字広く寢息立て

渋谷啓子

蛸や舟盛りの来る奥座敷

村上菜々子

二百余の年輪数へ汗拭ふ

高橋キセ子

波音を沖へ押しやり浜踊

原 稔

蛸やいつもの刻にいつもの木

長浜利子

母を呼び父を呼びつつ星月夜

岡田政信

永住の知らせ信濃の鬼胡桃

鴻坂佳子

父よ来よ鞍はなけれど茄子の馬

古川 邑秋

秋蟬の骸ゆるりと曳かれゆく

辻 さだを